

感性を高めるための、高等学校における音楽科鑑賞授業の工夫

覚張 俊哉¹

I 主題設定の理由

高等学校の音楽教育に求められているもの

高等学校における音楽教育は、卒業後も彼らが生涯にわたって音楽を愛好しようとする心情を育てるとともに、感性を高め創造的な表現と鑑賞の能力を伸ばすという重要な役割を担っている。悲しいときも嬉しいときも一緒にいてくれる・・・音楽が、そんな、いわば心のよりどころになって欲しいと願っている。

ここでいう感性とは音楽を構成する美しさ、つまり、リズム、メロディー、ハーモニーや、楽曲の形式美などを感じ取る力である。特に、芸術作品を深く味わいながら聴く鑑賞の授業を通して、音楽科教育の目標の達成をはかりたいと考えた。

次に、本校の特徴について述べる。本校は男女共学の総合科学高校であり、各科及びクラスの第1学年生徒在籍数は、次に示す通りである。

■ 情報工学科	40名	男子 29名	女子 11名
■ 総合電気科	39名	男子 38名	女子 1名
■ 電子機械科1組	39名	男子 39名	女子 0名
■ 電子機械科2組	39名	男子 35名	女子 4名
■ 建設工学科	38名	男子 29名	女子 9名
■ デザイン科	40名	男子 5名	女子 35名
■ 科学科	38名	男子 27名	女子 11名
	計	男子204名	女子 72名
		合計	273名

(平成12年3月1日現在)

高等学校の芸術科目は、普通高校に於いては美術や書道、或いは工芸というように選択肢があり、生徒はそれぞれ得意な分野を選択し学習を深めていくことができる。しかし、本校は芸術科目は1年次に全員が音楽を履修することになっている。そのため、授業に参加する生徒は必ずしも音楽に興味や関心の高い生徒ばかりではなく、

芸術作品を積極的に鑑賞しようとする生徒が多くはないのが現状である。

このような状況にあって、音楽的な価値観が完成されようとしている生徒に、一過性ではなく時代を超えて受け継がれている芸術的価値の高い作品に触れさせ、生涯にわたって音楽を愛好しようとする心情を育成するにはどのような手立てが必要であるかについて考えていくこととした。

聴かされる音楽から聴きたい音楽へ。音楽鑑賞の授業を生徒の主体的な学習活動の場とすることにより高等学校における音楽教育の目標が達成されると考え、研究主題を次のように設定した。

感性を高めるための、高等学校
における音楽科鑑賞授業の工夫

II 研究の内容

1. 高等学校音楽科における鑑賞授業のありかた

作品を今日的視点から見ただけではなく、その作品の作曲された年代にまで遡ってその時代の視点からとらえていくことにより、作曲家自身の伝えなかったことや表現しなかったことが立ち現れてくることがある。また、作品を通して諸外国の風土や文化にも触れることも可能で、当時の時代背景や思想、更には音楽や音楽家のおかれていた位置や、その音楽が多くの人の心をとらえ魅了したことなどについても深く学び取ることができる。

このようなことから、取り扱う鑑賞教材は是非とも高等学校1年生に聴かせておきたい内容であることを十分考慮したうえで精選しなくてはならない。

鑑賞活動は個人の自由な時間に於いても可能ではあるが、敢えて学校で授業時間内に行うことの意義は、同じ演奏を聴いても人によって感じ方が違うことに気付いたり、同じ作品であっても演奏者や編成によって受ける印象の違いが理解できることである。そして、このような学習活動を積み重ねることにより生徒一人一人が自分自身の感性を高めていけるであろうと考える。

そこで、感性を高めるための鑑賞授業のねらいを次のように定めた。

- ・一つ一つの作品を深く味わいながら聴くことができる
- ・他の人の意見を聞き音楽観を広げることができる
- ・音楽を形づくる諸要素を理解することができる
- ・バロック時代から現代に至るまで音楽を幅広く享受できる
- ・音楽を構成する美しさを感じ取る能力を身に付けるこ

¹川崎市立川崎総合科学高等学校教諭
川崎市総合教育センター長期研修員

とができる

- ・諸民族の音楽文化の多様性とその価値を理解することができる

2. 感性を高めるための鑑賞授業の工夫

受け身となりやすい鑑賞活動を主体的な学習活動とするため、次の4点に配慮した。

- ・学習形態はグループ学習で行う
- ・事前の調べ学習を実施する
- ・グループごとの発表を取り入れる
- ・鑑賞教材(曲目、演奏者、演奏形態、メディア)を精選する

(1) 学習形態・調べ学習・発表について

一人で一人の作曲家について調べるという方法も考えられるが、今回は、1班6名程度のグループを任意に編成させて学習を進めた。

グループ内で話し合っ一人の作曲家とその人の作品の中から1曲を選び、生涯、作風、作品にかかわる時代背景などについて一人一役の役割を分担し、それらについて図書館などを利用し深く詳しく調べた。そしてその結果を持ち寄り、発表でみんなに最も伝えたい部分や、もし自分達はその作曲家だったら・・・などについてグループ内で検討を重ねた。

これらの活動を行ったことにより、学習に深まりが見られるようになった。また、作品を積極的に聴こうとする態度が生徒に現れてきた。

発表の場面で生徒が伝えたいことがよりの確に伝わるようにという願いから、印刷物、掲示物、板書等を使って発表するよう指導した。また、全てのグループのリハーサルには必ず立ち会い、説明する早さや声の大きさなどについてきめ細かな指導を行った。

生徒同士の中にも、お互いに気付いたことを率直に指摘し合う等より良い発表を目指そうとする姿が見受けられるようになった。

(2) 鑑賞教材を精選することについて

鑑賞で取り上げる作曲家及び作品は、ねらいが達成できるものという視点から教科書より選定した。同じ作品でも演奏者や編成によって受ける印象や感じ方が変わるので、できるだけ生徒の心に響く演奏を取り上げるよう努めた。また、珍しい楽器編成へのアレンジメントがある場合は、2～3曲を生徒に聴き比べさせた。更に、コンサートホールで生演奏を聴く時のような臨場感を味わわせたいという理由から、CDを聴くときには音楽室の

照明を暗めに設定したり、或いはLDを使用して視覚的な効果をねらうなど、演出やメディアの選択についても十分に考慮した。

【授業で使用した教材一覧】

■ A. ヴィヴァルディ

和声法とインヴェンションの試み op.8 1-4

演奏者：イ・ムジチ合奏団

フェディリコアゴスティーニ (Vn.)

Recorded at Venice.9/1989 PHLC-4801

：アンネ＝ゾフィー・ムター (Vn.)

ヘルベルト・フォン・カラヤン (Cond.)

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

ベルリン、カンマームジークザール落成記念

コンサート・ライヴ10/1987

：ナイジェル・ケネディ (Vn.)

イギリス室内管弦楽団 Recorded at the West
Way Studios 12/1989 TOLW-3541

：ラリー・コリエル、山下和仁 (Gt.)

Arr.by ラリー・コリエル、山下和仁

大島みちる、渡辺香津美, SM 058-0022

■ J.S. バッハ

ブランデンブルク協奏曲 BWV 1046-1051

演奏者：ウィーン・コンツェントゥス・ムジクス

ニコラウス・アーノンクール (Cond.)

W60Z 25007

無伴奏チェロ組曲 第1番ト長調 BWV 1007

演奏者：パブロ・カザルス (Vc.) TOLW-3639

：ミッシェル・マイスキー (Vc.) 1993 UNITEL

トッカータとフーガ 二短調 BWV 565

演奏者：カルロ・カリー POLI-1068

：マリーナ・ネフスカヤ

：モーリシー・メルノウィッツ MMD 1011

■ L.H. ベルリオーズ

幻想交響曲 op.14

演奏者：クラウディオ・アッパード (Cond.)

シカゴ交響楽団

F35G 50065

■ A. ドヴォルザーク

交響曲第9番 ホ短調「新世界より」op.95

演奏者：カール・ベーム (Cond.)

JHC 0127

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

■ G. ホルスト

組曲「惑星」op.32

演奏者：シャルル・デュトワ (Cond.)

モントリオール交響楽団

POCL 2763

(3) 発表及び鑑賞に至るまでの経過

音楽の授業は2単位であり、発表や鑑賞の流れを止めないために1単位50分の授業を2時間連続で行っている。1学期の終わり頃にオリエンテーションの時間を1時間程度設け、夏休みの課題と2学期の授業へ向けた説明を行った。

生徒の活動の流れは、次の①～③の通りである。

①夏休み直前のグループでの活動

1班6名程度のグループ編成をする→調べ学習の役割分担を決める→作曲家と作品を選ぶ

②夏休み中の個人の活動

一人1テーマで調べ学習を行う

③2学期に放課後などを利用したグループでの活動

発表資料の検討→発表スタイルのデザイン→準備→リハーサル

(4) 実際の授業の流れ

本校の音楽の授業は、年間を通して50分×2時間連続で行っている。今回の鑑賞授業に於いても2時間を次のように組んだ。

2時間連続のうち、前半の1時間は生徒が発表(1時間あたり1グループ)。発表が終わった時点で内容を振り返り簡潔にコメントをし、生徒同士で質問や意見交換をした。後半の1時間は、その作曲家の作品の中から1曲を鑑賞した。生徒は鑑賞をしながら特に印象に残った点については随時自分の感想をノートにメモした。次に、同じ作品であっても演奏者によって表現が異なり、聴き比べを行うことで作品の色合いが変化するというところを感じ取って欲しいというねらいから、演奏者を変えて鑑賞した。

3. 授業後の調査

(1) 調査の目的と内容

・グループ学習、事前の調べ学習、発表、鑑賞という流れで学習を進めてきた。この授業が生徒の主体的な学習活動の場となり得たか、また、感性を高めることにつながったかを探るため、鑑賞授業(鑑賞単元)終了後に下記の設問により調査を実施した。できる限り生徒達の本音を聞き出したいという考えから、記述式とした。

・設問内容

設問1:事前の調べ学習を済ませ、それに基づいて鑑賞授業を終えた今の気持ちについて聞かせて下さい。

設問2:鑑賞授業全体を通してあなたが学習したことは何ですか。

(2) 調査の方法

- ・調査期間 平成11年11月から平成11年12月
- ・調査対象 第1学年生徒在籍数参照
- ・調査場所 音楽の授業時間内に音楽室で
- ・調査形式 記述式

(3) 調査結果と考察

記述式にしたことで幅広い回答を得ることができた。その結果を比較的類似した項目ごとにまとめた。また、設問1と設問2の回答がそれぞれ重なる部分があるので、分けずに項目ごとに考察した。

・グループ学習に関わる回答

「グループ内で協力し合うことができた」「自分の役割を責任をもって果たすことができた」「グループ内のお互いをよく知ることができた」「協調性が養われた」

・事前の調べ学習に関わる回答

「歴史に名を残す音楽家達の努力や、音楽に対する情熱の傾け方に感動した」「今まで聴いたことがある作品も、違った気持ちで聴けるようになった」「クラシック音楽に対するイメージが変わり、好きになった」

・発表に関わる回答

「同じ作曲家であっても各グループごとに調べた内容が少しずつ異なっており、ひとつの曲をいろいろな角度から聴くことができた」「他のグループの発表にかかわる作品を聴いてみたり、クラシック全般に興味が沸くようになった」「調べたものを先生に提出するだけでなく、みんなの前で発表するということが大切だと思った」「先生の説明を聞くだけでなく、自分自身で調べたことをもとに発表し、授業を進めるという方法が良かった」

事前の調べ学習を経てから発表するという学習方法を取ったことにより、今までは只漠然と聴いていたり或いは聞き流していたクラシック音楽に対し、今後は積極的に関わっていかうとする姿勢が見えるようになり、授業の成果がみられたようである。

一方、グループ学習に積極的に参加せず、「ストレスが増えた」「意味がない」「歌やリコーダーの方がいい」などと回答した生徒もいる。今後は、これらの生徒に対する指導法について研究をする必要がある。

(4) 授業実践から見えてきたこと

・グループ学習を取り入れたことについて

役割分担をすることにより一人一人がより深く調べることができた。このことにより、楽器編成の違いによって受ける印象が変わることや演奏者によって表現が異

なることなどを知り、深く聴くことができるようになった。また、意見交換も活発に行われるようになった。更に、もっと他の曲も聴いてみたいという意見も以前より多く聴かれるようになった。

- 事前の調べ学習を取り入れたことについて
鑑賞前に予備知識を得ることにより、今まで聞き流していた作品が、より身近な音楽としてとらえられるようになったようである。また、作曲された当時の時代背景などを知ることにより、作品のもつ意味について考えることができる生徒もいた。更に、作曲者の苦悩や思いを知り、現在の自分と重ね合わせて深くじっくり味わって聴く生徒もいた。
- 発表を取り入れたことについて
自分の伝えたい内容をどのように発表すれば一人でも多くの人に理解してもらえるかについて学習したようである。また、友人の発表内容を聞き、作品理解の視点を見いだす生徒もいた。
- 鑑賞教材を精選したことについて。
同一作品について編成や演奏者を換え授業の前に数曲聴き比べをし教材の精選につとめたことや、鑑賞時には照明を暗くするなど演出効果について工夫をしたことで、自宅で鑑賞するのとは異なった醍醐味や感動を味わうことができたようである。更に、映像の使用などの工夫をすることにより、一段と興味を持って鑑賞することができるのではないかと考える。

Ⅲ まとめと今後の課題

鑑賞を通して感性を高めるための授業の工夫について研究を進めたが、事前の調べ学習に基づいて作曲者や作品について発表し、作品を鑑賞した後に意見交換をすることは、鑑賞を深める点で有効な手だてであることが明らかになった。このことが、主体的な鑑賞態度を養い感性を高めることにつながったと考えられる。しかし、これを検証するためには意識調査の項目分析や、授業結果のより綿密な分析が必要であることを痛感した。

事前の調べ学習についても、インターネットの利用やニューメディアの活用等、積極的に取り入れていく必要がある。また、音による表現を伴った発表や、発表の前にはできるだけ多くの演奏を聴き比べさせ、自分たちの心を揺り動かした演奏を選びこれを発表に繋げていくような指導が必要であると感じている。

最後に、恵まれた音楽環境の下に生まれ育った生徒や、高い感性を持つ生徒の能力をさらに伸長するための指導方法についても研究を進めていく必要がある。

おわりに

川崎市立高等学校へ音楽科教諭として着任し13年目。今年は、今まで自分が音楽科教育にどのように携わってきたかを問われる1年間であったと思う。ここで研究した成果を学校現場へ持ち帰り、明日からの授業に生かしていきたい。

まだ、研究のスタート地点に立ったばかりである。これからも自分の音楽科教育に疑問を抱きつつ、日々精進していきたい。

最後に、本研修の機会を与えて下さった川崎市立高等学校校長会の先生方、川崎市立川崎総合科学高等学校の同僚の方々、そして川崎市総合教育センターの皆様方、1年間本当にありがとうございました。

【参考文献】

- | | |
|---------------------------|-------------|
| ジェームズ・L・マーセル『音楽的成長のための教育』 | 1992年 |
| 西園芳信『音楽科カリキュラムの研究』 | 首友社 1993年 |
| 音楽の鑑賞指導小学校編(財)音楽鑑賞教育振興会 | 1995年 |
| 小原光一・山本文茂『音楽教育論』 | 教育芸術社 1997年 |
| 音楽教育研究報告第14号(財)音楽鑑賞教育振興会 | 1997年 |
| 音楽教育研究報告第16号(財)音楽鑑賞教育振興会 | 1998年 |
| 平成8・9年度第7回音楽教育研究助成団体研究概要 | 1998年 |
| 音楽教育 | 教育芸術社 1999年 |

【指導助言者】

- | | |
|-------------------|-------|
| 東海大学講師 | 小原 光一 |
| 川崎市総合教育センター研修指導主事 | 中島みどり |